

シードブック

子ども家庭支援論



松村和子 編著

柴田啓一・中村 涼・吉島紀江・武田(六角)洋子・平野順子・庭野晃子
山村けい子・中島 修・深津さよこ・森下葉子・西田泰子 共著



建帛社
KENPAKUSHA



は し が き

皆さんがこの科目を勉強するころには、実習もふまえて保育士、幼稚園教諭として少しずつ仕事の具体的なイメージをもちはじめていることと思います。入学前の漠然とした「保育所の先生、幼稚園の先生」といった子ども中心の保育者像から、子どもと共に保護者への心配りが必要な仕事だということを身をもって知ったことでしょう。子どもの行動の背景には、必ず保護者がいます。保護者が安定して子育てをしていないと、子どもも安心して園生活を楽しむことが難しいでしょう。

それにしても、虐待がニュースにならない日はありません。皆さんは自分が子育てする将来、どのような親になるのでしょうか。いつも明るく、子どものことを考えている、やさしい親でしょうか。「親になったのだから、子育てはできて当たり前」「子ども好きで保育者になったのだから、完璧な子育てができるはず」と周りの人は見えています。さて、どうでしょうか。

皆さんにぜひ見ていただきたいDVD、文献があります。第15章で紹介したNHKが調査研究した結果をまとめた「ママたちが非常事態」です。これによると、現代は人間の子育てが大きく変わるときなのだそうです。特に、日本の母親の置かれている状況は、とてつもなく「孤独」です。産後うつになって、亡くなる人も後を絶ちません。「ママ友を見つければいいじゃない」と言われるかもしれません。しかし、この「ママ友」を求めてあちこちさまようこと自体、日本特有の現象なのだそうです。なぜ、このような子育てがづらい、孤独な状態になっているのでしょうか。

人間は群れで生活をしている動物です。しかし、日本の現在は核家族化が進み、群れの唯一のメンバーである父親は仕事で不在です。本来は群れの中で血縁を問わず、誰かしら子どもを見てくれる人がいて皆で子どもを育てる共同養育をしているはずですが、今は24時間、365日母親一人の「ワンオペ育児」になっているのです。そこで、血縁や近所といった群れの代わりに、社会的なシステムの中で子育ての共同養育をしようとしています。子育て支援センターで遊びの場や相談、一時預かりができる場所を提供したり、保育所や幼稚園で

も同じような活動が行われたりしています。つまり、保育所、幼稚園も社会的な共同養育の担い手となっているのです。

また、本書には法律の面からも社会で子育てをしようとする施策を紹介しています。子育て世代包括支援センターもその一つです。これはフィンランドの「ネウボラ」というシステムを参考にしています。ネウボラについても、ぜひ調べてみてください。皆さんの住んでいる町にもあるかもしれません。

本書で学ばれた皆さんが保育の現場に立ったときに、保護者に適切な支援をし、また支援を受けられる紹介先を案内できるようになっているとよいと思います。保育所や支援センターで「子育てがづらい、助けて」という声を受け止められるようになりたいものです。

2019年3月

編者 松村 和子



も く じ

第Ⅰ部 子ども家庭支援の意義と役割

第1章 子ども家庭支援の意義と必要性	1
1. 家庭支援へのまなざし	1
2. 家庭とは？ 家族とは？	2
3. 家族を取り巻く社会の激変	5
第2章 子ども家庭支援の目標と機能	12
1. 児童福祉から子ども家庭福祉への転換	12
2. 子どもにとっての支援	13
3. 大人になること・親になること	14
4. 子どもがいるすべての家庭に対する支援	16
5. 社会にとっての子ども家庭支援	17
第3章 子ども家庭支援における保育士等の役割	21
1. 保育所保育指針における「保育所の役割」	21
2. 社会の変化から求められる役割	25
3. 保育士の専門性から期待される役割	27

第Ⅱ部 保育士による子ども家庭支援の基本

第4章 保育士に求められる基本的態度	32
1. 保育士と保護者の協働—保育所保育指針から	32
2. バイステックの7原則—保育現場での活用	33
3. 保育現場における連携力	40
4. 保育者に求められる受信型技術と発信型技術	40
5. 子どもの立場からみた保育士の基本的態度	41
第5章 保育の特性と保育士の専門性を生かした 子ども家庭支援	44

1. 保育士の専門性	44
2. 子ども理解の視点	48
3. 保護者理解の視点	50
4. 他の専門職からみた家庭との連携方法	51
第6章 保護者との相互理解と信頼関係の形成	57
1. 子どものウェルビーイングのために	57
2. 相互理解とは	57
3. どのように信頼関係を築いていくのか	61
4. 保育者ならではの専門性の発揮	66
第7章 家庭の状況に応じた支援	71
1. 保育所保育指針からみる、家庭の状況に応じた支援の必要性	71
2. 子どもの発達段階に応じた支援	73
3. 家庭の状況に応じた支援	77
第8章 地域の資源の活用と関係諸機関との連携・協力	84
1. 子どもや子育て家庭の支援を行う機関や施設	84
2. 地域の資源	89
第Ⅲ部 子育て家庭に対する支援の体制	
第9章 子育て家庭の福祉を図るための社会資源	97
1. 保育所保育指針の改定	97
2. 保護者・家庭および地域と連携した子育て支援に必要な社会資源	98
3. 社会資源としての専門機関	102
第10章 子育て支援施策・次世代育成支援策の推進	109
1. 「家族機能の社会化」が求められる社会	109
2. エンゼルプランと子育て支援施策	112
3. 少子化対策の進展と子ども・子育て新制度	120
第Ⅳ部 多様な支援の展開と関係諸機関との連携	
第11章 子ども家庭支援の内容と対象	125
1. 妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援	125

2. 支援を生かす情報提供	132
3. 保育所を利用している家庭への支援	133
4. 地域の子育て家庭への支援	134
5. 幼稚園における子育て支援	134
6. 環境を通じた支援の特性	135
第12章 保育所等利用児童の家庭への支援	139
1. 保育所における子ども家庭支援の基本的事項	139
2. 保育所の支援の実際	141
第13章 地域の子育て家庭への支援	156
1. 地域の中で子どもを育てる	156
2. 地域子育て支援センターにおけるさまざまな支援	160
3. 地域の子育てを支えるために	165
第14章 要保護児童およびその家庭に対する支援	168
1. 要保護児童およびその家庭に対する支援	168
2. 障害や慢性疾患をもつ保護者への対応	179
3. 多文化への対応	180
第15章 保育の現場での子ども家庭支援の現状と課題	185
1. 保育の現場でみる子ども家庭支援の現状	185
2. なぜ、子育てはつらいのだろうか	187
3. 保護者を支援することは、子どもを支援することにつながる	193
さくいん	197

第I部 子ども家庭支援の意義と役割

第1章



子ども家庭支援の 意義と必要性

1. 家庭支援へのまなざし

本書を手にした読者の皆さんは、家庭支援と聞いて何を思い浮かべるだろう。

一つには、近年の報道の多さから、**児童虐待**という言葉を連想するかもしれない。児童虐待通報件数は年々うなぎ上りで増加し、2017（平成29）年度の速報値で13万件を超えた。この数値は、厚生労働省が統計を取り始めた1991（平成2）年（1,101件）に比べると、実に100倍以上の数値である。児童虐待が社会的に認知され、それまで表面化しなかった事例がみえてきたことがその一因にはなっているだろう。しかし、その一方で児童虐待による死亡件数は減少する傾向をみせていないことも事実である。

もう一つには、子育て家庭へのさまざまな支援があるだろうか。望んでも子どもが授からず、「妊活」（不妊治療に励むこと）を行う人がある一方で、子育てに悩み、行き詰まる人がある。こうした育児をめぐる困難さは何が原因なのだろう。

育児は、家庭の中で家族によって行われる営みである。社会や時代とともに子育てのあり方は変化するのであるが、現代における育児を囲む社会的な環境について目を向けて、子育て家庭が置かれる状況を理解することは大切なことである。

まずは、家庭を取り囲む問題や家庭あるいは家族のあり方について、みてみることにしよう。

2. 家庭とは？ 家族とは？

(1) 家族の歴史

家族は、人類が誕生した頃から人間集団の最小単位として存在し、子どもを生み育てたり、年老いた親を養ったりする機能を備えたものとして普遍に存在してきたかのように一般的に思われている。

しかし、子どもの養育役割や夫婦の結び付き、きょうだいの中で誰が親を養うかといったことは、時代によって大きく異なる。例えば、日本で育児や家事が主として母親の役割であると考えられるようになったのは明治以降のことである。江戸時代の武士階級において日々の子どもの世話は母親や祖母が担ったが、しつけは主として父親の役割・責任であった。農民階級にあっても家業を継がせる子どもの教育は主として父親が担ったのである¹⁾。

明治以降、日本においても近代化の波が押し寄せ、士農工商といった身分制度が解体し、都市で賃金をもらって働く労働者が増えることで、生活の様子は大きく様変わりした。このような社会の大きな変化の中で現代と過去の家族や家庭において最も異なる点は、生活領域（家庭）と職業領域（職場）が空間的に分離したことである。庶民の間に通勤が生まれ、賃金によって人々の暮らしが維持されるようになると、家庭の中における夫と妻の役割が固定化されていくこととなった。また、育児は母性を担う母親が愛情をこめて行うものであるという言説が普及した²⁾。

また、1人の女性が出産する数も時代によって大きく変遷した。富国強兵策により戦時中には子どもをたくさん産むことが奨励されたが、戦後になると一転して食糧不足や人口増大の懸念から少なく産んで大切に育てることが奨励された。現代においては合計特殊出生率（出産可能な年齢（15～49歳）において1人の女性が生むと考えられる子どもの数）が、人口維持に必要とされる水準である2.1を大きく下回り（2017（平成29）年で1.43）、少子化と高齢化が同時に進行する**少子高齢社会**となっている（図1-1）。

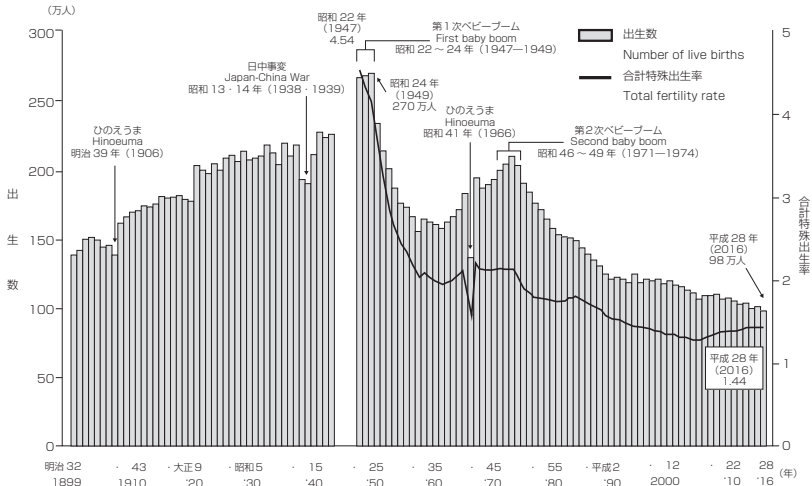


図1-1 出生数および合計特殊出生率の年次推移（明治32～平成28年）

〔厚生労働省政策統括官（2018）平成30年我が国の人口動態，p. 9 より抜粋〕

（2）家庭の機能と機能不全

子ども家庭支援を学ぶ上で、基本的な概念である**家族**と**家庭**について理解することは重要である。家族社会学者の森岡³⁾によると「家族とは、夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的なかわり結びで結ばれた、幸福（well-being）追求の集団である」とされる。

一般的に家族という語は同居する親族、あるいは同居はしていないが血縁関係のある者を指す語として用いられている。一方、家庭という語は世帯と重なる。世帯は日本の「国勢調査」では「住居と生計を共にしている人々の集まり」とされていることから、世帯は必ずしも血縁関係がある必要はない。子ども家庭支援という場合、子どもを保護・養育する保護者は血縁にある親に限らず、里親も含めた子どもを養育する家庭の支援という意味が込められている。

家庭の機能とは社会において家庭が果たす役割のことであるが、時代や社会によって家庭の果たす役割は異なる。アメリカの文化人類学者マードック（Murdock, GP）⁴⁾は、1組の夫婦と子どもからなる家族を、**核家族**と呼んだ。核家族には、①性的機能（夫婦間の性的充足）、②経済的機能（経済活動

を行い住居と食を共にする), ③生殖的機能(子どもを産み育てる), ④教育的機能(子どものしつけと教育)があるとした。①と③がなければ社会は消滅してしまうだろうし, ②がなければ生命活動が止まってしまう。④がなければ文化が止まってしまうとし, 核家族は人間の社会生活において不可欠な機能を果たしているとした。

だが, こうした機能のすべてが家庭のみで果たされているわけではない。例えば, 共働きで子どもがいる世帯は, 日中子どもを養育できないため保育所等が養育機能を担っている。高齢者の場合にも高齢者介護施設やヘルパーなど家庭の機能を補完する役割をもった福祉が存在している。子どもの教育に関しては学校や塾があり, 家庭での教育の役割を補完している。

また, 私たちは誰でも病気や失業などによって日常生活が阻害されるリスクを背負っている。幼い子どもがいる子育て世帯を想定してみよう。夫や妻がもし病気で働けなくなったり, 勤め先が倒産してしまったりなどして給料が入らなくなると, とたんにこの家庭の生活は成り立たなくなる。再就職先を探すか, 共働きであれば仕事の続いている夫もしくは妻の労働時間を増やすなどしてこの危機を乗り越えようとするが, 場合によっては以前の暮らしを維持することが難しくなることもある。また, 病気で家事や育児ができなくなると, その負担は1人の肩にのしかかる。子育て家庭においては, 生計を維持するための労働と, 家事や育児の役割の遂行が必要とされるのであるが, 日常生活を脅かすリスクにさらされて役割が機能しなくなると「機能不全」となる。このように, 家庭は不慮の変化に対して脆弱な面も持っているのである。

さらに, 親は子どもに対して一義的に養育の責任をもつとされ, 子どもにしつけや教育を行うものとされるが, 親が子どもに対して支配的に振るまったり, しつけと称して暴力がふるわれることもある。「教育しなければならない」「しつけなければならない」といった親の焦りが子どもに対する過剰な介入(虐待)になることもあり, 親をこうした心情に駆り立てる要因を理解することが, 子ども家庭支援論の目的の一つとなる。家族の中だけでは解決することが難しいリスクに対処するために, さまざまな社会保障制度が用意されており, 必要に応じて的確な制度に接続するための知識や役割が福祉の専門職には求められるのである。

3. 家族を取り巻く社会の激変

(1) 家族の多様化と小さくなる家族の規模

社会学者の広井⁵⁾が指摘するように、「戦後、核家族化が進行したことによって、家庭の機能が低下し、子どもの発達・成長に問題が生じているといったことが、繰り返しいわれている」。だが実際に、核家族化は進行しているのだろうか。図1-2をみると、核家族を示す世帯は②～④であり、核家族の割合はほぼ一定して6割程度で推移していることが読み取れる。しかし、核家族の中でも「夫婦と未婚の子のみ」の世帯の割合は一貫して減少しており、子育て中の世帯が減少していることがわかる。かつては、「夫婦と未婚の子」世帯は全世帯の中で最も多い世帯であった。ところが今や、一人暮らしの「単独世帯」と「夫婦のみ」の世帯は、父母がそろって子育てをしている世帯（夫婦と未婚の子のみの世帯）と肩を並べる程度に増えている。もはや、子育て中の世帯は主流とはいえない状況となっているのである。

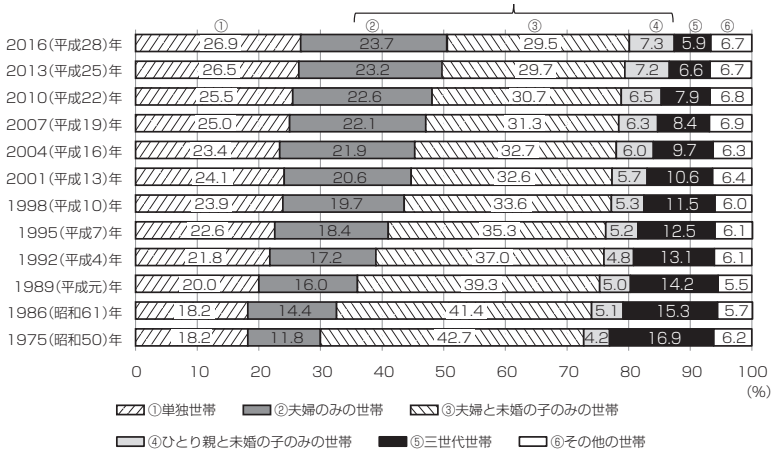


図1-2 世帯構造別にみた世帯数の構成割合の年次推移

[厚生労働省(2015)平成26年国民生活基礎調査, 厚生労働省(2018)平成29年国民生活基礎調査の概況より筆者作成]

損することもあれば、いったん仕事を辞めて子どもが幼い時期は育児に専念する手段を取ることもある。しかし、いったんキャリアが途切れると、これまで積み上げてきた経験や知識が途切れ、思い描いたとおりの再就職が難しくなることも考えられる。子育て家庭はこうしたジレンマを抱えながら日々格闘しているといえるだろう。

とはいえ、人の生涯の中で子育てに費やす時間は限られている。2018（平成30）年の時点で、日本人の平均寿命は、女性が87.26歳、男性が81.09歳となっている。子ども1人の子育てにかかる時間は約20年だと考えると、子育て後の生活は子育てにかかる時間と同等かそれ以上に長いものと考えられる。

人は、未来を考えることができる動物である。キャリアを中断し、育児に専念した母親・父親は、いかに子どもが可愛くて子育てが大事であるとわかっていても自分の将来を考えると不安に駆られることがある。忙しいながらも家事・育児といった共通の役割をシェアしている共働きの夫婦より、専業主婦の育児不安の方が強いというのは、こうした事情によるものもある⁹⁾。

育児にかかわるさまざまな立場の人の気持ちを理解し、寄り添いながら支援することが求められるのである。



アクティブ・ラーニングのテーマと視点

1. 子どもの声を騒音ととらえる人たちの心情を考え、解決策を考えてみよう。
2. 携帯電話やスマートフォンの普及によって、人々のコミュニケーションはどのように変わったか、考えて話し合ってみよう。
3. 育児不安がなぜ生じるのか話し合ってみよう。

■ 引用文献

- 1) 太田素子（2017）江戸の親子 父親が子どもを育てた時代、吉川弘文館。
- 2) 牟田和恵（1996）戦略としての家族 近代日本の国民国家形成と女性、新曜社。
- 3) 森岡清美・望月崇共（1997）新しい家族社会学 四訂版、p.4、培風館。